



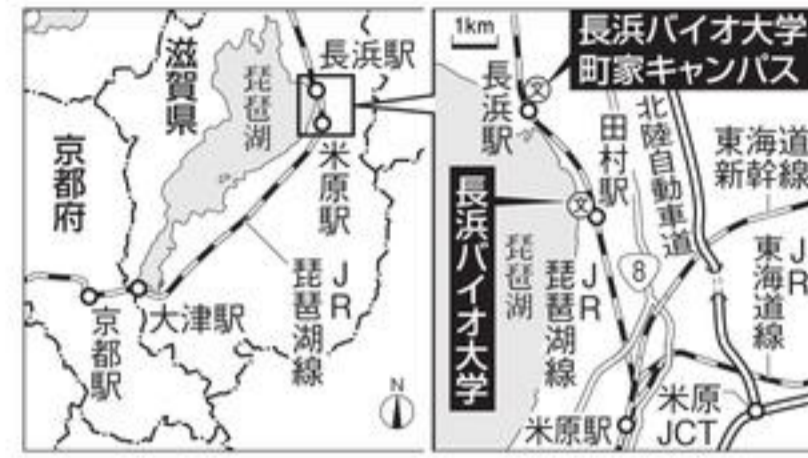
長浜バイオ大学



京都市で予備校や専門学校を運営していた関西文理学院が、長浜市の大学誘致の要望を受けて2003年、開学した。バイオ科学専門の単科大学で3学科と大学院で約1180人が学ぶ。

来年4月に学科が再編され、生命工学や食農科学などを学ぶ「フロンティア」、医学系、創薬系の「メディカル」、動物科学が中心の「アニマル」の三つのバイオサイエンス学科が誕生する。就職先は医薬品や食品、化学関連の企業が多く就職率は高い。また国公立大学の大学院への進学も近年、増えている。

大阪駅も名古屋駅も100分



JR北陸線田村駅前にあり、同駅には新快速が停車する。JR大阪駅とJR名古屋駅からも約100分で、地元のほか大阪、京都、岐阜から通学する学生も多い。地元のベンチャー企業との共同研究を多く進めている。また長浜市の観光地、黒壁スクエアに町家キャンパスを開き、学生と地域との触れ合いの場になっている。

地域に提案 就活開眼

江戸時代、旅人の疲れを癒やしたお灸。中山道の柏原宿(滋賀県米原市)で使われたお灸のもぐさは、近くの伊吹山の名をとって「伊吹もぐさ」と呼ばれ評判が高かった。今もふもとの長浜市や米原市にもぐさを製造、販売する老舗企業が集まる。なかでも「山正」(長浜市)は鍼灸師向けのもぐさを製造、販売する。品質の良さはプロも認めている。

「山正」は、長浜バイオ大学の学生が提案した新たな健康商品を開発中で、10月に長浜市内で開かれるビジネスメッセで披露する。もぐさは、ヨモギの葉の裏に生える糸くずほどの柔毛だけを集めて作られる。残りの葉は廃棄するしかない。同社では年間約200トンのヨモギを仕入れているが、95%は捨てられる。

2年前、長浜バイオ大学が2、3年次を対象にしたキャリア教育授業

まなびバ! 大学編

商品・活性化策 キャリア教育で

(滋賀県長浜市)



もぐさの商品価値などを検討する学生ら=いずれも長浜市田村町

に、同社の押谷優助さん(30)が講師に招かれた。学生が5、6人でチームを作り、商品開発や売り方などを提案する模擬授業だ。夏休みに1週間集中して開かれ、最後に順位を決める。そのなかで上位に入った案にヨモギの抗菌作用を利用した様々な商品の提案があった。さっそく押谷小助社長(59)に報告し、開発が決定した。押谷社長は「廃棄されるヨモギを利用してできないかと薄々、考えていたが、学生のユニークな新商品を聞いて背中を押された」と話す。

キャリア教育授業は2008年から始まった。実験やフィールドワークが多い学生への就職支援が目的だ。企業のほか、長浜駅前の第三セクター商業ビルの活性化案づくりや、福祉作業所での実習などの授業もある。担当の松島三児教授(66)は技術経営Ⅱは「地元企業や地域社会と積極的に関わり、社会に出てから役だてほしい」と願う。

微生物学研究室で学んでいるバイオサイエンス学科4年の岩田光将さん(22)は養蜂メーカーへの就職が決まっている。社会で何をしたいかぼんやりとしか考えてなかったけど、キャリア教育ではっきりしてきた。ウイルスの研究を生かした新たな養蜂の分野を切り開きたい。ユニークな挑戦に夢をはせる。(田中昭宏)



キャンパスの眼前に広がる琵琶湖と地元、長浜市について関心のあることを探求し、発信していこうという学生のクラブ活動「琵琶湖研究部」。毎月1回の湖岸の掃除のほか、51人の部員が毎月、テーマを出し合い活動に取り組んでいる。

7月は「長浜ウッドクラフト」。14、

15日に市内の観光地、黒壁スクエア周辺に同校が古い町家を借りあげたキャンパスで、観光客や子どもたちに地元産のヒノキでキーホルダーやはし置き作りを教えた。副部長の2年棚野航平さん(19)が市北部の森林を歩いて「琵琶湖の周辺の森は深い」と感じ、部員に声をかけた。地元の製材会社に取材し、かつて琵琶湖周辺の町は林業で栄えたことを知った。「今は忘れられた琵琶湖周辺の姿を子どもたちに伝えたかった」という。



地元産材を使った木工を教える琵琶湖研究部の学生=長浜市元浜町の町家キャンパス

これまで琵琶湖清掃の際に出たごみのガラス片を磨いて装飾品を製作し、環境保護を訴えた。昨年10月の学園祭では、琵琶湖で採れたブラックバスでカレーを作って販売したところ好評だった。棚野さんは「琵琶湖の色々な姿を多くの人に知ってもらいたい」と話す。



湖北地方の伝承野菜、アブラナ科の尾上菜は漬けものやみそ汁の具、煮物などに使われ、地元の家庭の食卓で親しまれてきた。しかし栽培が難しく、スーパーで扱われるほかの葉菜に押され栽培農家が減少し、現在は市内の4軒の農家で作られているだけだ。

バイオサイエンス学科の蔡晃植教授の研究室では、先端のバイオ技術を利用して尾上菜の安定した栽培とブランド化を目指している。地元ベンチャー企業の植物工場ですを使わず、安定的に大量生産できる仕組みを研究しており、昨年度から2021年度までの国の「私立大学研究ブランディング事業」に選ばれた。

栽培農家から種をもらい、まずは学生らが農家の指導を受け学内で栽培。さらに遺伝子情報の解析や、栽培時に植物にあてるLEDライトの光の波長などを調べている。研究室の大学院修士課程1年

の上ヶ平柚歩さん(22)は「高校生の時、青いバラができたというニュースでバイオ技術に関心を持った。伝承野菜にもバイオが使えることを実証したい」と言う。



地元の伝承野菜の復活を目指す蔡晃植教授(手前左から2人目)研究室の学生ら=長浜市田村町